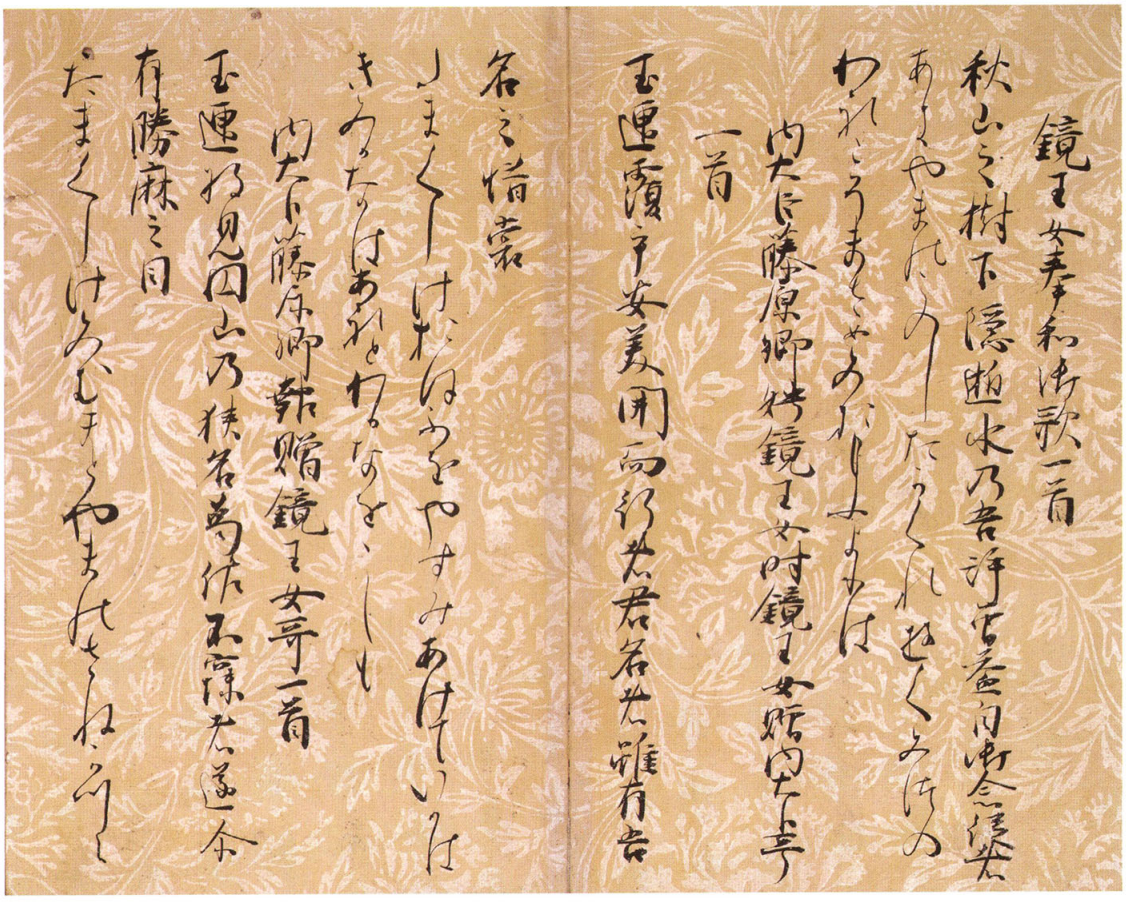

17　金沢本万葉集　藤原定信

彩箋墨書　二一・四×一三・三
平安時代、十二世紀

一帖〔三の丸尚蔵館〕

金沢藩主前田家に伝来したことにちなんで、この名で呼ばれる古筆の名品である。当館所蔵の一帖には、『万葉集』巻第二のうち、途中二箇所の数紙を欠いた巻頭目録より巻末までと、巻第四の七十九首を、表裏装飾の料紙に書写した三十九枚を収める。本作品の伝来については、宝永四年（一七〇七）仲春、第五代藩主綱紀が内桐箱の一つの蓋裏にその伝来を記している。それによれば、この〈万葉集〉は祖父利常（第三代藩主、一五九三～一六五八）の遺愛の品であること、漢字と仮名を交えて書された稀代の好書であるが、一部の欠損が惜しいことが記されている。利常、綱紀共に文芸に深い関心を抱いて、文人と交流し、工芸技術者等を保護したが、自らも優れた作品を蒐集した。特に綱紀は書物奉行をおいてまでも和漢の良書を蒐集し、新井白石に〝加賀は天下の書府なり〟とまで言わせたという。前田家で大切に保管された本書は、明治四十三年（一九一〇）七月八日、東京本郷の前田家に明治天皇行幸の折、当家伝来の他の品と共に献上された。当初は、巻第三と巻第六の断簡も共に装幀されていたが、献上の記念に外されて一帖に仕立てられ、前田家に残された（現在、前田育徳会所蔵）。

本書の筆跡については、平安後期に管絃と和歌に優れた才を発揮して知られる源俊頼（一〇五五～一一二九）と伝えられてきたが、これまでの研究により、今日では藤原定信（一〇八八～一一五四～）の筆と考えられている。定信は、能書で三跡の一人として著名な藤原行成に始まる世尊寺流の第五代にあたり、康治元年（一一四二）の近衛天皇大嘗会屏風の色紙形を書するなど、能書として知られる。小野道風〈屏風土代〉（作品番号8）の跋文の筆者でもある。

料紙は、中国から舶載された唐紙に倣って日本で制作された和製唐紙で、具引き地は白色を中心に、黄色が多数と緑色が一枚で、花亀甲繋文、花菱花唐草文等の和様の文様、亀甲繋文等のように唐紙の文様に倣いながらも類型化した文様などの十八種類の型文様が雲母刷りによって表されている。その上に書写された文字は、一字一字の字形にとらわれず文字の流れや全体の流動感による美しさを追求した完成度の高い筆跡である。所々に節筆（せっぴつ）や筆の震えが見られ、また「し」の文字をことさら長く太く書するなどの技巧を凝らしている。美しい料紙に和漢の文字で和歌を書き連ねていくというこうした平安後期の作品は、優雅で華麗な調度を強く意識して、「書」による美の追求がもたらした優れた文化遺産と言えよう。

（釈文は115頁参照）

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

書の美、文字の巧

三の丸尚蔵館展覧会図録No.74

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
　　宮内庁書陵部
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十八年九月十七日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan
The Archives and Mausolea Department
Imperial Household Agency